

第 21 回「人間の器、について考える」(2012/5/26)

場所：632 カフェアッセンブリールーム A (表参道)

司会、文責：野田

参加者：18 人

要約：人間に関して用いられる、器という言葉が意味するものについて対話しました。個人の持つ力量や才能といった特徴として捉える見方と、他者に対する評価のものさしとして捉える見方が提出されました。

お題の説明：人間に関して、器と言う言葉を用いることがあります。この言葉が意味するものについて考えました。

内容：

1. 器という言葉の、人間に関連した用いられ方にはどのようなものがあるか。器という言葉自身から考えたこと
 - ・ 器には何が入るのかという疑問が最初に提示されました。
 - ・ 器が大きい、小さい。
 - ・ 「総理の器」といった、役割のようなもの。
 - ・ 人間そのものを器に例えて、外から見えるものを器、外からは見えないものを器に入っている中身として捉える見方も提示されました。
 - ・ 器自身はがらんどで、中身がないという指摘がありました。
 - ・ 人間に関連して、器といった段階で、大きさがあり、内側と外側があるものだと決めてしまっている。人間は変化するものであり、他者との壁を低くすることが出来る。器にとらわれないと可能性が広がる。
2. 「器が大きい、小さい」の器について
 - ・ 金環日食(5月21日)の時に、観察用眼鏡を持っていない他人にわざわざ声をかけて、貸してあげたおじさんがいて、器が大きいと感じた。楽しさを共有したかったようだ。
 - ・ 器が大きいとは、受け入れ、吸収し、飲み込む能力が高いことであると考えた。赤ちゃんは吸収する能力が高いが、器が大きい大人は、赤ちゃんとは何かが違う。
 - ・ 赤ちゃんは、経験や知識が乏しく、確固とした自分というものを持たないため、反発せずに受け入れることが出来る。
 - ・ それに対し大人は、成長するに従って信念が強固になり、自分が出来るので、視野が狭くなる。自分と異なる他人と対峙する時、経験や知識や価値観が邪魔をして反発してしまうことがある。他者を受け入れるには、他者の言動を自分なりに咀嚼し、解釈し、己の価値観の中で位置づけ、場合によっては価値観を変化させることが必要となる。そういったことが出来ることが「器が大きい」ということである。
 - ・ 人間の健全性のためには、他者とのコミュニケーションが必要である。器が大きく、他者を受け入れることが出来ると、コミュニケーションが豊かになり、健全である。

- ・ 器の大きさとは、不快なものを肯定的に受け入れられる、或いは不快なものが変化し、永続しないことを理解して受け止めるという心の柔軟性のことである。この意味では、他者への評価や、他者からの評価とは関係ない。
- ・ 自分の器が大きく、色々なものにチャレンジできる方が人生楽しい。
- ・ 器が大きくて、他者を許すことは一見するといいことのように見えるが、社会全体では悪に対して寛容であることになり、良くないことであるかもしれない。

3. 社会的な機能としての器

- ・ 組織の中で、周りを引っ張っていく、リーダー的な人が「器が大きい」。組織全体を見て、人の上に立ち、多数の人を抱えることが出来る人である。他者を受け入れることが出来る優しい人は、この文脈では器が大きいのではなく、心が広い。とはいうものの、心が広くないと人の上に立てない。
- ・ 職場の上司や仕事仲間は器の大きい人を望む。
- ・ 大人は社会の中で役割を果たしながら成長していき、器が大きいというのと近い。
- ・ 他者に対して願望や期待があって、それをしてくれる人に対し、～の器だ、とか、器が大きいというように評価する。行動を元に他者を評価する基準である。
- ・ 全く異なる複数の能力を持つと、器が大きい。医者でありながらアイドルであるとか。
- ・ 器が大きいとは、行動力や決断力と言った個々のスキルの和で表されない、総合的な力があることである。

他者との関わりを中心に考える人と、少数ですが自己を基点として考える人がいました。器という言葉は重い響きを持ちますが、色々な捉え方が出来る曖昧な言葉のようです。そういった曖昧な言葉で人を評価するのは、人間という存在が、柔軟に変化することで様々な状況に対応できるという、他の存在にない特徴を持っているからかもしれません。